
甘党陛下と酒やけ王女

煤竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘党陛下と酒やけ王女

【Nコード】

N5366Z

【作者名】

煤竹

【あらすじ】

とある酒場で。

「いつものを頼む」

カウンター越しに注文をする男。ここで過ごすひと時は、男にとって心安らぐものだった。

「ちよつと聞いてくださいよ!」

…だったのだが。

「なんだ?」

突如隣の客から声を掛けられる。見ればすでに出来上がっている女

が一人。

少し風変わりな二人の出会いは、こうして始まった。

こちらは小話「甘党男と酒やけ女」の前世の物語です。

甘党な陛下と酒やけ声の王女がいかにして近づいていくのか。

ファンタジー成分が圧倒的に足りないファンタジーなお話です。

01・なぐさめ陛下とくだまき王女（前書き）

こちらのお話は「甘党男と酒やけ女」に出てきた男と女の前世の物語です。

よろしくお願ひします。

01・なぐさめ陛下とくだまき王女

人々の陽気なざわめきが広がる酒場の一角。

厨房にほど近いカウンター席の端に、一組の男と女がそこにいた。

「…それでね、いきなりお見合いしろって言われてね」

「ああ」

「急も急によ？ひどいと思わない？」

「そうだな」

時折ジョッキを傾けながら酒やけのせいか掠れ気味の声で隣に座る男へ切々と語る女。

くだを巻く女の話、隣の男は相槌を挟みながら聞いている。

「私はさ、次女だし、上に兄も姉もいるから家を継ぐっていう心配なく育ったのね。聞こえは悪いけど気楽な身の上ってやつ」

兄は既に家を継ぎ、姉は一昨年の春に隣国へ嫁いだ。いつか自分も姉のように嫁がなければいけないと思っていたが、よもや見合い相手が悪すぎる。

「見合い話はいつか来るとは思ってたんだけど、さすがにね」

「そんなに相手の男が気に入らないのか？」

「気に入らないっていうかなんて言うか…。私、夢があってさ」
「夢？」

「お酒、大好きなのよ」

「それは、まあ、お前を見ていれば分かるな」

男と話を始めてから女は既に麦酒をジョッキで5杯おかわりしている。男の持つグラスの中身はほとんど減っていないのに、だ。

「で、見合い相手は大国のちよつと偉い身分の人なの」

私もちよつとした身分の人だからさ。言葉少なに聞いている男に冗談めかした笑みを浮かべ、先日見合い話を聞かされた時の苦い気持ちの流れし込むように女はジョッキを呷る。

「私としては、そんな大国に嫁ぐなんて大それたことは他の人に任せて、酒蔵を経営している酒好きな人と結婚したいんだ」

言外にこの見合いは荷が重いのだという思いが籠る。それを聞いた男は「何故」と問う。

「酒蔵をやってるならお酒に強いだろうし、奥さんが酒好きでも恥ずかしくないでしょ？あと、自分好みのお酒も作ってみたいかなあ。…お見合い相手と結婚しちゃうとそういうこと出来ないのよね。それにさ、相応しくないでしょ」

女はヘラツと笑った。

「相応しくない？」

「女のくせにお酒が大好きだし、飲み過ぎて声なんて酒やけしてるし、がさつだし…」

自分で自分に打撃を与え、カウンターへ突っ伏すその姿に男は女の頭をポンと叩いた。

「酒好きでも良いじゃないか、その声も悪くないぞ。…がさつは

個性だろう」

「慰めなんていらないう。酒好きな奥さんなんて恥ずかしいもの。私が相手だったらこんな嫁欲しくな……くはないか。一緒にお酒を飲めるならそれはそれで楽しそうかも」

落ち込んだと思っただけで勝手に浮上する。くるくると感情が変わる女の隣で男はひっそりと笑った。

「確かにその飲みっぷりは毎日見ても飽きないだろうな」

「ありがとー。でもさ、隣に置きたい相手じゃないよね」

「そうか？」

「自由に育ちすぎたの私。…変わり者だもん」

「変わり者、か」

男は何か思うことがあったのか、遠くを見る目つきで手元に視線を落とす。

「俺も、変わり者と言われている」

「そうなの？」

「ああ。お前の酒好き以上に知られると恥ずかしいかもな」

そう言っただけで苦笑い、先付として出された炒った豆を口に放り込む。塩味の中にほんのりと豆本来の甘みを感じ、男は口元を緩めた。

「…俺もな、家のために見合いをしるとせつつかかれている」

「おおー。お兄さんもなんだ」

「二つしか違わんだろうが」

「二つでも年上でしょ」

くすくすと笑う女は、残りの麦酒を飲み干して給仕に7杯目のお

かわりを頼んだ。

「本当によく飲むな」

「だって美味しいんだもの！…呆れちゃう？」

上目使いに訊いてくる女が妙に可愛くて。

「いや、面白い」

男はもう一度女の頭に手を乗せ、今度はその黒髪を優しく撫でた。

「お兄さんは、お見合い受けるの？」

「この歳までふらふらしていたからな。観念する時期ではあると思っているが…」

「ふうん…ちゃんと考えてるのね」

女は冷えたジョッキに浮かぶ結露を指でなぞり指先で遊ぶ。

「ちゃんと考えていたら、この歳まで独身じゃないだろう」

男は手に持つグラスを何とは無しに揺らした。

「25歳かあ。男盛りじゃない。お兄さんもてるだろうにもったいない」

「嫌というほどもてるな。もてすぎて女性が恐ろしいほどだ」

「うわあ、言うね。でもガツガツしてる女性ほど怖いものはないなあ」

「だろっ？だから逃げ回っていたんだ」

「怖かったね？」

女がよしよしと灰褐色の髪を撫でてやれば、男は肩を揺らして笑い出した。

「本当に面白いな。頭を撫でられるのは子供時代以来だ」

「良い子は頭を撫でてあげる。これ子育ての鉄則ね」

「…俺は子供と一緒にか」

口を尖らせて拗ねたような男に、にんまりと女はまた手を伸ばした。

が、その手に先んじて逆にわしわしと男に撫でられる。負けじと女も男の頭を撫で、思うさまお互いの髪を掻き乱し、腹を抱えて笑い合った。

一頻り笑って疲れた女は再びカウンターに突っ伏していた。顎に乗せたまま正面を向いていた顔を男の方に動かし、その手元のグラスを見る。すっかり氷がなくなつて薄まった琥珀色がもったいなく感じた。

「…ねえ、氷溶けちゃったよ」

「……ああ」

ゆらゆらと分離した中身を揺らし、男は口元に運ぶ。ほんの少し唇を湿らせただけでグラスを元の位置に戻した。

「あまり飲まないのね」

「…まあな」

「お酒、好きじゃないの？」

ニヤリ。男は意地悪そうに口の端を持ち上げて笑う。

「横に酔い潰れそうなお嬢さんがいるのに、俺が酒を飲めるか」

そう言っつて、女の顔にかかっている黒髪をそつと掬い、耳殻を掠めるように左耳にかける。

「ふうん、あわよくば持ち帰ろうつて？」

「見合いをする女を持ち帰るといっつのは、相手の男に悪いかな」

「じゃあ、私はあなたのお見合い相手の女性に悪いことするわね」

ふふっ。突然、女が肩を震わせて笑い出した。

「どうした？」

「あなたが悪いと思う相手は、今頃私に激怒してると思うよ」

だってね、

「お見合い、今日だったの」

可笑しそうに、目じりに涙さえ浮かべて女は笑う。

「逃げちゃった。お兄さんのこと、笑ってられないね」

力無く目を閉じ、溜まった涙がころりと落ちる。

「私さ、そんな器じゃないから、怖くなっちゃって…、待ち合わせ

せの場所に向かう途中で、付き添いの人たちを振り切って、ここに逃げ込んだの」

閉じた瞼から溢れる涙。それは疾うに笑って出たものではなく、懺悔の涙に変わっていた。

「ほんとに、突然の話だったから、心の準備も何も出来てなくていきなり対面とか…、私のんべえだし、酒やけ声だし、頭が破裂するかと思っ…」

十分に体に回った酒が感情の箍を外し、女の口からとりとめのない言葉を紡ぎだす。

ずっと不安に思っていたのだろう。浴びるように酒を飲んでいたのは、少しでも逃げ出した現実を忘れるように。

拭うことを忘れた女の頬に、男はそっと指を伸ばして雫を払う。触れられた感触に目を開き、戸惑いの眼差しのまま男を見上げた。

「ごめんね、今日会ったばかりのあなたに話してもどうにもならないのに、こんなこと…。でも、どうしよう、怒らせちゃいけない相手なのに、怒らせちゃった…」

「…大丈夫だ」

「あなただつて、相手が見合いに来なかったら…、怒るでしょ？当然よね…」

「怒らないさ」

女の気を落ち着かせるように、男は優しく撫で、優しく語りかける。

「何故、そう言える？あなたはあの方じゃないし、怒らないはずないっ。私は、なんてことを…っ」

くしゃり、と顔を歪める。頬を撫でる男の手から逃れるように俯いた女に、男は深く息を吐いた。

「……俺も、逃げてきたから」

男の吐息と共に零れたのは、女と同じ懺悔の言葉。

「な、に…？」

「俺も今日、見合いだっただ」

その言葉に顔を上げ、涙に濡れた瞳で見上げる女に悪戯を白状するような面持ちのまま、言葉を繋ぐ。

「俺は相手が来るのを待つ側だったんだが、直前になって抜け出した。それでここに逃げ込んだのさ」

お前と一緒にだな。そう言って男は笑う。

「どうして…？」

「変わり者って言っただろ？俺も相手にそれを知られたくなくて、逃げ出した。お前はさっき俺が考えてるって言っていたが、実際は何も考えてないのさ」

「…それほど、知られたくないことなの？」

コトン、と目の前に差し出されたのは男がずっと持っていたグラス。

「それ、飲んでみな」
「えっ」

氷が溶けて久しく、温まった琥珀色の液体。水と酒が分離したようになつたこれを、男は飲めという。

「これを、飲むの？」

「ほとんど口を付けてない。…温いし、味も薄まってると思うが」

グラスの中身の見た目は薄まったモルト酒のように見える。女はおずおずと手を伸ばし、グラスを傾けた。

最初に感じたのは水の味。だが琥珀色の部分が口に入った途端、女の表情が一変した。

「甘っ！なにこれすっごい甘い！？」

喉を焼くような味を想像していただけに、まるで砂糖水のような甘さに面食らってしまった。

くつくつと声を殺しながら笑っている男。悪戯が成功した少年のような笑顔で、再び腹を抱えていた。

「それ、俺のために特別に作った甘い茶だ」

「は?!」

「一見、普通の酒に見えるだろう？酒場で違和感なく飲めるように作らせたんだ」

驚きの余りに涙も引つ込み、「意味が分からない」と女の顔にでかでかと正直に書かれている。目が零れ落ちそうな程に見開いて固まっている女の肩を引き寄せて、グラスを握る女の手には、男は己の手を添えた。

「俺さ、甘いものが好きなんだ。子供が好むような菓子なんて、それこそ好物だ。その代わりというか、…酒が全く飲めなくてな」
「え？」

女の視線から逃れるように顔を反らした男の顔は、酒を飲んでいないはずなのに耳まで赤く染まっていた。男の重なった手は、しきりに親指を動かして女の手の甲を撫でている。

「…大の男が甘党で、しかも酒が飲めないなんて、恰好つかないだろう。…呆れたか？」

先ほどの女と同じく、上目使いで訊いてくる男。それをぶんぶんと勢いよく首を振って否定する。

「そんなことない！お兄さんも面白いよ！」

「そうか、面白い、か。ありがとう…？」

「でも、いいの？知られなくなかったんでしょ？」

「ああそうだな…、あまり知られたくない秘密だな」

じゃあ何故私に話したのか。女はそう言おうと男の顔を見ると、そこにはまた、あのニヤリとした笑顔があった。

「秘密を知ったからには、ただじゃ済まないな」

「……は、い？」

「俺と見合いしないかお嬢さん」

「は?!」

突然何を言い出すかと思えば。女は信じられないとばかりに身を引いた。

「お互い相手をすっぱかしたばかりだ。見合いする相手が変わったと思えば良いだろう?」

「よ、よくないわよ!」

「何故?」

「何故って、お互い素性も知らないっていうか、名前も知らないし!」

そもそも偶然隣同士になった男と女。女が酒に酔って男にくだを巻かなければこうして話をする事もなかったのだ。

「名前か。ここで言うのは少しばかり憚られるな」

「そんな御大層な名前をお持ちなの?」

「まあ。今はまだ、言えない」

男は意味深に笑う。

「で、こんな得体の知れない奴との見合いは、嫌か?」

「それは…」

男とは知り合ってまだ少ししか経っていない。話したことと言えばお互いの年齢と、見合いに対する愚痴だけだ。女が一方的に話していたと言ってもいい。

だが話をしている間はとても楽しく、居心地がよかった。

男に頭を撫でられるのも嫌ではなかった。

男に頬に触れられるのも嫌ではなかった。

…男の胸に引き寄せられたのも、嫌ではなかった。

でも。

逃げ出した見合いの席。双方の関係者に多大な迷惑を掛け、今また更なる迷惑を掛けることになる選択を、女の事情を何も知らない男を巻き込むことを、女は選ぶことが出来ない。

「……私……」

「ああ、そうか。そうだったな」

唐突に女の言葉を遮った男は、女のジョッキに手を伸ばした。

「酒が飲めない男では、お前と見合いをする資格はないな」

「え、ちよつと？」

ジョッキにはまだ半分以上も麦酒が残っている。それほど強くはない酒だが、飲めないという男が口にするのはいかなものか。

「約束だ。俺がこれを飲みきったら、何も心配せずに、俺と見合いしろ」

女が返事をする間もなく男はジョッキを呷り、中身を飲み干していく。

「ぐく、ぐく、と飲み下していく際に動く喉仏。

時折呻くように喉を鳴らし、苦しうに眉根を寄せているのだが、零すことなく最後まで男は飲みきった。

空のジョッキを叩きつけるようにカウンターに置き、顔を真っ赤にさせた男は隣の女を見る。

「……約束、だから、な」

鬼気迫る様子に中てられて固まっている女を、座り始めた目で睨みつけた男は、ジョッキを握ったままカウンターへ突っ伏してしま

った。

「え…、ねえ、大丈夫っ？」

慌てて女が確認すると、男は静かな寝息を立てていた。耳どころではなく、首筋までも真っ赤に染めて。

「寝、てる…。あ…はは

もう、笑っしかない。

「あははは…あゝあ。…とんだお子様ね」

すやすやと眠る男の乱れた前髪を直し、そのまま頭を撫でる女の表情は、とても柔らかかなものだった。

どうしようもないな、彼も、私も。

女はそっと、男の耳に唇を寄せて小声で囁く。

「…私の見合い相手はね、この国の皇帝陛下なの。それでも、あなたも一緒に陛下に立ち向かってくれる？」

深い眠りに落ちただろう男からの返事は無い。女も返事を期待したわけではなかった。

「明日、陛下に今日の謝罪と見合いの白紙をお願いしてくるわ。そしたら多分、私は国から追放ね」

追放ならまだしも、命が無いかもしれない。帝国に盾突いて無事で済むほど女の国は強くはないし、また自国も女を許してくれない

だろう。

女は男のグラスを持ち、ゆるゆると揺らす。

「……もし命があつて、また逢えたら、その時はお見合いしてね」

カチン。

眠る男が握るジョッキに女はグラスを当て、男が好むその甘い甘い琥珀色を不安と共に飲み干した。

昔々、ここではない、どこか別の世界で。

甘いものが大好きな皇帝が、酒好きな王女と出会った物語。

二人はまだ、互いを知らない。

皇帝は幸せな夢の中。

王女は明日への不安を抱いたまま。

共に歩む幕が上がるのは、まだ少し先のお話

。

01・なぐさめ陛下とくだまき王女（後書き）

初めての方は、初めまして。二度目の方は、またお会いできて光栄です。煤竹と申します。

小話「甘党男と酒やけ女」の過去というか前世編を脳内から引っぱり出してみました。

相変わらずの説明不足&名前すらまだ出てきていないこんな状態の陛下と王女ですが、これからどうぞよろしくお願いします。

その内に、きつと、たぶん、いろいろと出てきます。名称も、登場人物も。

連載方式にする必要があったのかはそれらをひっくりくるめてこれからの脳内妄想に賭けようと思っています。

最後までお読み頂きましてありがとうございます！

02・お久しぶりと初めまして(前書き)

サブタイトルが浮かびませんっ(´・`・;))

一話目より短めです。よろしく願いします。

02・お久しぶりと初めまして

荘厳な雰囲気にも包まれている皇城の一室。

複数の人間がそれぞれ己の職務を全うしようとしている中、男と女が数奇な対面を果たしていた。

「……………」
「……………」

女の側に立つ人物が男の側へ謝罪の言葉を述べているが、男と女の耳には入らない。

何故、あなたがここにいるの。女がそんな眼差しを送れば。それは、こちらの台詞だ。男もそんな眼差しを返してきたのだった。

昨日、それぞれ見合いの席を逃げ出したという男と女。
偶然にも逃げ込んだ酒場で隣同士になり、そこで女は愚痴を吐き、男は慰め、最後には二人が見合いをするという約束を交わしたばかりだった。

そして今日、女は見合いを欠席したことの謝罪と見合い自体の白紙を願いに、相手である帝国ジェヴォークスの皇帝陛下の御前にい

るのだった。

そのはずだったのだが。

「では、後は若いお二人だけで…」

女の側が平身低頭、誠心誠意を込めて謝罪を繰り返したお蔭で、
今。

男と女は城の中庭を二人で連れ添って歩いているという状況だった。

さく、さく、さく。

柔らかな芝生を踏みしめる二つの足音。

さわさわと風に揺れる木立のささやきや、小鳥のさえずりなどが
耳に心地よい。

穏やかな沈黙がこのまま続くのも悪くはないと思っていたのは男
だけだったのか。

「…どうして、…」

男の後ろを着いてきていた女がその沈黙を破った。

昨日堪能したばかりの女の酒やけに掠れた声が、男の心を震わせ
る。

また、泣いてるのか。男は苦笑する。

「どうして、か。これは全く…、どうしてだろうな」

不可思議な縁もあるものだ。男は心のうちで独りごちる。

男は足を止め、女へ向き直る。

「ここはそうだな。初めてましてということ、自己紹介をするか」

そう言って、涙が零れ落ちそんな女の目の縁へ指を寄せる。掬い取った雫を己の唇に乗せ、「しょっぱいな」と少年のように笑った。

男が女を連れてきたのは池のほとりにある東屋。

池には淡い桃色の花が浮かびながら咲き誇り、男が今の時期に一番気に入ってる場所だ。

籐で出来た椅子に女を座らせ、男も隣の椅子に腰を下ろす。

「さて、俺から言おうとしよう」

言い出したのは俺だからな、と笑えば、女からもぎこちない笑みが返ってくる。

「俺の名は、アウリス・レオハルト・ジエヴォークス。この帝国ジエヴォークスを治めている。歳は25。好物は…甘い物だ」

男はごそごそと懐から小さな包みをいくつも取り出し、二人の間にあるテーブルへ置く。それは色とりどりの飴だった。

「知っているか。糖分は疲れた頭を癒す効果があるそうだ」

橙色の包みを一つ取り、包み紙を解いた中身を口の中に放り込む。柑橘の爽やかな甘さが口に広がり、男の口元に自然と笑みが浮かんだ。

「俺は考えるのが苦手だからな。甘党だからという理由以外でも持ち歩いてるんだ」

言いながら男は、今度は紫色の包みを取り、取り出した丸い飴を女の引き結んだ唇に押し付ける。

「美味いぞ？」

ニヤリ。

あの酒場で女が何度も見た、意地悪な笑い方。まだ一夜しか経っていないのに、何故かひどく懐かしい。

女は口を薄く開き、男の指先から飴を受け取る。舌の上で転がすと、濃厚な葡萄の味がした。

「…甘いのが苦手って、分かってるでしょ」

眉間に皺を寄せて、思わず呟く。

「だったら、甘くない飴を作らせてみるか」

葡萄酒の味だったらお前も大丈夫かな。

男の言葉が、女の胸に甘く響いた。

「私は、サフォーデュ国第二王女、リユーディア・シルヴィ・サフォーデュと申します。歳は23。好きな、物は……、」

「……くっ……そこで、言い淀むか」

肩を揺らして笑いを堪える男。いくら知っているからとはいえ、この場で大々的に言うには女にはまだ憚られる。

「陛下、女性を笑うとは大変残念なお方ですわね」

「残念なのはお前の方だ。なんだ、陛下とは」

目じりに薄ら涙を浮かべ、ひいひいと苦しそうにしている男を睨みつける。

「陛下は陛下でございましょう」

「止める、鳥肌が立つ」

「では、どのようにお呼びしると?」

「アウリスでいい。それからその喋り方も止せ。似合わないぞ」

「そういう訳にも参りませんアウリス陛下」

「陛下をつけるな」

「……アウリス様」

「わざとやってるのか?」

見た目に反してこの男の中身はなかなかに幼い。

黙っていればジェヴォークスの若獅子などと呼ばれているらしい美丈夫だというのに、口を開けば悪戯好きな子供のような男だ。

女は一つため息を吐いて、覚悟を決める。

「アウリス」

「なんだ」

「今日、私はジエヴォークスの皇帝陛下に昨日の謝罪と見合いの白紙撤回をお願いしに来たの。……陛下の御処断には如何様にも従います」

蓋を開けてみれば相手も逃げていたというが、結果はどうであれ女が逃げ出したのは紛れもない事実。だというのに厚かましくも白紙に戻すよう要求しているのだから、どのような罰も受け入れなければならぬ。

沈み行く心を奮わせて、男の様子を窺う。

「謝罪は先ほど受け入れた。許すと言ったはずだ」

その言葉に、ほっとする。

「……だが、白紙撤回は許せんな」

ぐっと低くなった声で男は言った。

やはり、怒っているのだろうか。

言ってしまったえば男も女と同様、逃げ出したのだから罪の深さは一緒ではないのか。

そもそも見合いを白紙に戻す話は酒場で交わした男との約束を守るためのことなのだから仕方ない。

仕方ないというか、……あれ？そもそも白紙に戻す必要ないんじゃない？

「リユーディア」

「はいい？」

混乱の極みにいた女が突然名を呼ばれ、素っ頓狂な声を出してしまった。

見れば、男が思いのほか近くにいます。

「ちょ、近いんですけど」

「昨日はこれよりもっと近くにいたな」

肩を引き寄せられた時のことか。
思い出して女は羞恥に染まる。

「リユーディア。見合いを白紙にするとお前は言うが、それは昨日の約束の為か？」

「そ、そう、です」

「それはつまり、皇帝としてではなく、俺と見合いしても良い、と？」

「しても良いっていつか、『しろ』って言ってたじゃない」

酒場で一方的な約束を取り付けて、男は女の返事を聞かずに酔い潰れてしまった。

「俺が言ったから、見合いするの？」

「え、と、何で、言えばいいの？」

真剣な面持ちで徐々に近づいてくる男。

ゆったりしているとはいえ、一人掛けの椅子に逃げる隙間などすくなくなくなってしまう。

隅に追い詰められた女の頭は、ぐるぐると考えがまとまらない。

何故、男が迫ってきているのか。男が何を言っているのか。私はどうすれば良いのか。

ああ、こういう時に人は糖分が必要と感じるのね。

先ほど食べさせられた眉を顰める程のあの甘ったるい飴が、今は何故か恋しく感じられた。

02・お久しぶりと初めまして（後書き）

どこで切っていいのか、どこまで長くしていいのか、悩んだ末にひとまずここまで。

書いてる間はどこまでも続けてしまうので長さの加減が難しいです。

ここまで書いて思ったことと言えば、陛下がすべからく変態ちっくですね。

ひと肌に温めた液体を飲みます（1話目）、涙を舐める、手ずから飴を舐めさせる…。

涙に関してはもう味わうものと魂が認識しているのかもしれない。来世でもやらかしましたし。恐ろしいです陛下。

そして書けば書くほど文体が変わっている気がしてなりません。こちらにも恐ろしいです。…精進致します。

最後までお読み頂きましてありがとうございます！

03・甘党陛下と酒やけ王女（前書き）

前回の続きから始まります。
よろしくお願ひします。

03・甘党陛下と酒やけ王女

「リユーディア」

抑えた声で女の名を呼ぶ。

男の指先が顎を捉え、俯いていた女の顔を持ち上げる。自然と男の視線と合わさり、見つめ合う形になった。

かわいそうなくらい体を固くした女に「落ち着け」と笑う。

「俺も、この見合いは白紙にするつもりだった」

「…え」

笑みから苦笑いに変えた男が、女の顎から頭に手を移し安心させるようにその黒髪を撫でた。

「元々、俺はこの見合いは納得していなかった。いつまでも妃を娶らない俺に痺れを切らせた奴らが仕組んだ席だったんだよ」

女が座る椅子の肘置きに腰を掛け、緩く女の肩を抱き寄せる。

「最初は義務だと思って好きにやらせていたんだが、…土壇場で怖気づいた」

男は話しながら女の肩に乗せた手でぽんぽんと拍子を刻み、声音に少しばかり自嘲を含ませた。

「皇帝がこんな情けない男だと分かったら、どんな女も失望するだろう?」

甘い物が好き、酒が飲めない、女が怖い。謳うように男は自分のことを諳んじる。

黙って聞いていた女は引き寄せられるままに男の腹に凭れさせていた頭を「そんなことない」と横に振る。女のその仕草に、男はとても嬉しそうに笑った。

「ごういうのは隠しきれるものと思っていないからな。だから見合いを逃げ出した。…安直だよな」

「…私も一緒だから何も言えないわ」

「そうだったな。『変わり者』と呼ばれていることも一緒だったか」

「…事前に読んだあなたの身上書にはそんなこと一言も無かったけど」

「奇遇だな。俺の方もだ」

見合わせて男と女はくすりと笑う。

「まあ、逃げたついでに甘い物でも飲むかと馴染みの店に飛び込んだわけだが」

その店とは男と女が出逢ったあの酒場。

「そうしたら驚いたよ。人目も気にせず浴びるように酒を飲んでいる女がいたんだから」

店の扉を潜るとすぐ目につくカウンター席。そこの一番右端に豪

快にジョッキを呷っている女がいた。

男はあの時、吸い寄せられるかのようにして女の左隣に座り、給仕に「いつものを」と注文して隣に座る女を暫し観察した。

女はまるで水を飲むかのようにジョッキを呷り、次々と空にしていく。どれだけ飲むつもりなのかと目を見張る男をよそに、女の勢いは止まるところを知らず。

いつしか男は手の内のグラスの中身を飲むことを忘れていた。

「あの時は人が酔い潰れるのを見るのも一興かと思ったんだが…、当てが外れたな」

「なっ…、一興?!」

「あれだけ気持ちのいい飲みっぷりは見たことが無かったからな。怒ったか?」

当たり前だと無然とする女に「悪かった」と男は謝った。しかし笑顔の男に反省の色はなさそうだった。

「だがお前から声を掛けられた時はもつと驚いたぞ」

「なんで?」

「女から声を掛けられるのは、…ほら」

「…ガツガツしてると思ったのね」

「ああ。お前もその類いかと身構えたが…、違ったな」

ニツと笑って女の頬をつまむ。さして痛くも無いのに「痛いじゃない」と女は口を尖らせた。

「話を聞いていれば、俺の隠してるものと似たような部分を持つてるといふ。なのにお前はそれを曝け出して、楽しそうにして…」

「別に曝け出してたわけじゃ…っ、…」

男の言葉を否定しようとするが、すぐに尻すぼみになっていく。女にも自覚があるようだ。

女はあの時、男に話しかける大分前から飲んでいたが、話し始めてからもぐいぐい飲み続けた。男が聞き上手だったからか、女は見合の席を逃げ出した不安も忘れてただただ楽しい時間に杯を重ねていた。

「だって…、カッコイイ人が隣で愚痴を聞いてくれるものだから、お酒も楽しく進むのも仕方ないじゃない」

それはもう、感情の箍を外すまでたんまりと。

「褒めてもらって光栄だが、今は飴玉しか手持ちがないな」

「いらぬわよっ」

すかさず返る心底嫌そうな言葉にくっくっつと肩を揺らして男は笑う。

「この飴はそんなに不味いか？」

「甘さが私に合わないのよ…ってまた口元に持ってくるの止めて

よー」

「遠慮するな」

「遠慮じゃない！」

ああ、何故こんなに楽しいのだろう。

互いの正体が分かってなお気取らない女との軽口のような会話がとても心地よい。これが打てば響くというものなのかと男は思う。

もっと彼女のことを知りたい、自分のことを知ってほしい。ただの男と女としてあの酒場で出会い、何の銜いも無く話をする内に男

は自然とそう思うようになっていた。

その思いが、女との次に繋げようと飲めない酒を飲んでまで強引に約束を交わさせたのかもしれない。

そこではたと男は気づく。

…もしかして、俺は、彼女に恋をしているのだろうか？

ふと過ぎったその考えが、すくと男の腹に落ちてきた。見合いを白紙にして欲しいと願った彼女を許せないと言った己の言葉。何故そう言ってしまったのか、その意味も気づいてしまえば男の中で答えが決まる。

「リユードイア、約束を果たそう」

男は立ち上がり、女の前に立つ。膝を折り、女の目を見据えながら男は口にする。

「俺との見合いを受けてはくれないか」

もう一度初めからやり直そう。彼女も同じ思いを抱いていてくれれば、了承してくれるはず。この胸にある思いもその時に伝えよう。

男が真摯にぶつけたその願い。だが、その意に反してきよとんとした女の顔がそこにあった。

「……それは、一体、どついう表情なんだ」

図らずも男の声に凄みが加わってしまったのは仕方のないことだ

った。

女は「男が何を言ってるのか分からない」という表情をしていたのだから。

「…え、お見合い、もう一度やり直すの？」

「何？」

今度は男がきょとんという表情をする。

「だって私たち、今まさにお見合い中…でしょ？ほら、仲人の人達を交えて来賓室で話をして、後は若いお二人で…とか何とか言われて中庭に来て、二人で話をして…って」

「…泣いて、今日ここに訪れた理由を見合いを白紙に戻してほしいと言っていたが？」

「あれは、見合いをすっぱかしたくせに今日はどういっつもりで来たのかってという説明よ。…泣いちゃったのは、大国に盾突いたからただじゃ済まないはずと気が張ってたからで…」

ただで済まないどころか、命も無いかと思っていたのだ。皇帝が男と知った時の女の安堵感は計り知れない。

「だから、約束はもう果たされてるでしょう？」

「…ということは何だ…、改めて言わなくても良かったのか…」

女の言葉に知らず力が入っていた身体が脱力し、項垂れて女の膝に頭を乗せる男。それに慌てた女は灰褐色の髪を慰めるようにして梳いた。

「大体、お見合い相手が約束の相手だったわけだし、わざわざ白紙に戻すこともないかなって思ったんだけど。どちらも結局はあな

たなんだから」

「…その通りだな」

その通り過ぎて、男は苦く笑うことしか出来なかった。遠回りを
してしまつた見合いの席に、気づかぬうちについていたなんて。

忍び笑いを漏らす男の頭上からため息と共に呆れた声落ちてく
る。

「…落ち込んでるところ悪いんだけど、どいて下さらないかしら」

二人がとつているその姿勢。結婚前の男と女がとる姿勢ではない
と女は言いたい。そもそも女の膝に顔を埋めるなど紳士の行いでは
ないと女は男を諭す。

「嫌だ」

「んなっ」

「…と、言つたらどうする？」

「はあ？何を訳の分からないことを…って、ちよつと！！」

何かにしよげていたかと思えばすぐに立ち直り子供のようなこと
を言う。言うばかりか、あるうことか男はすりすりと頬すりまでし
始めた。

つい今しがたの姿は何だったのかと女はつい声を荒げてしまった。

「…このっ、お子様陛下！」

結局、男が何を言いたいのかも分からないままに悪戯を仕掛けら
れてはたまつたものではない。こんな冗談に付き合っていられない
とばかりに女は立ち上がる。

「悪かったリューディア。そんなに怒るな」

「怒らせてるのは誰だと思ってるの！」

「ほら、飴をやるから機嫌を直せ。これは比較的甘くないやつだ」

「飴はいらないうって言ってるでしょっ！今はお酒が欲しいわよ！

」！

これは飲まずにいられようか。女はすたすと歩いていく。

「リューディア」

男が呼び掛けても女は返事をしない。立ち止まってもやらない。

女のその様子を苦笑しつつ、男は胸の内にある気持ちを言葉を変えて口に乗せる。

「リューディア。…もし、お前が嫌では無かったらこの見合い、前向きに検討してほしいのだが…」

びたり。

男の前を歩いていた女がその言葉で立ち止まる。暫しの間肩を震わせていたと思っただけのため息を一つ吐いて、男へくるりと振り返った。その表情は疲労感が漂っている。

「あのね、どうして私が命を賭けてまで皇帝陛下との見合いを白紙にしたかったのかを考えればそんな弱気な台詞出てこないはずなんだけど」

嫌では無かったら？前向きに検討？ばかばかしい。ここまで来て言うべき言葉が違うんじゃないの？

女はじつと男を見据える。

「それは…」

なおも言い淀む男に、女は挑発的な顔をした。男が見せるあの二ヤリとした意地悪な顔だった。

「分からないの？じゃあ良いわ。お断…」

「ま、待て！」

女の言葉を遮るように男が手を突き出した。

女の意趣返しに男は困惑している。

俺は何かを間違えた？でも彼女は嫌そうにしている感じではない。…これは、あれか？つまり、そういうことなのか？

女が求めているだろう答えを、果たして直球で伝えて良いものか。散々女性から逃げ出していた男には今一つ自信が無い。試しに変化球を投げてみる。

「け、結婚を前提に、お付き合いを…」

「言い直し」

「っ」

変化球では駄目だったようだ。

目線と態度で促す女と視線を彷徨わせてしきりに己の手の甲を擦る男。

両者の間でまた沈黙が広がる。

さわさわと柔らかな風が男と女の間を通りすぎ、池に浮かぶ薄桃色の花の香りを運んでくる。鼻に届く甘い匂いに心をほぐした男は

意を決し、心を込めて女に告げる。

「俺と、……結婚してほしい」

風が運ぶ甘い香りと共に、この思いもどろろか届けと男は祈る。

女はやれやれといった風で首を横に振ったあと、笑顔で男に肯いた。

「はい、喜んで」

華やかに微笑む女の酒やけに掠れた声が、男の心を甘く揺さぶった。

昔々、ここではない、どこか別の世界で。

甘いものが大好きな皇帝が、酒好きな王女と出会い、恋に落ちた物語があった。

共に見合いを厭い、共に逃げ出した似た者同士の皇帝と王女。

不可思議な縁で出会い、一つの約束を交わした。

知らぬとはいえ互いに交わしたその約束も、巡り巡って元のさやに収まることとなった。

これからの皇帝と王女の歩む道は、夫婦円満に、きつと紆余曲折に、たぶん波乱万丈に、それは二人に幕が下りた後、来世の先までも続いていくことになる。

03・甘党陛下と酒やけ王女（後書き）

これにて、陛下と王女のお話は終わりでございます。

これからの二人は、悪戯を仕掛ける陛下に振り回される王女が逆襲して陛下を振り回してまた陛下が悪戯を…なんてループになるのでしょうか。バカツプル自重。

今後の予定としてはこぼれ話をいくつか載せられたらと思います。
未来の二人の話も考えたいですね。年末なので間が空くかもしれない
せんが。 (m | | m)

最後までお読み頂きまして本当にありがとうございました！

いぼね話 甘党陛下と辛党宰相（前書き）

陛下と王女が再会する数時間前のお話です。
よろしくお願ひします。

いぼれ話 甘党陛下と辛党宰相

とある城のとある執務室で。

二人の男たちが静かに対峙していた。

頭が痛い。

頭の中に大音量で響く鐘の音に、男は灰褐色の頭を文字通り抱えていた。

これから大事な客人を迎えなければならぬ男だが、この頭痛もさることながら目の前にいる強敵も同時に相手をしなければならなかった。

冷や汗を掻く男の姿に憐憫を感じ、僅かばかりの情けをかけてくれないものと部屋中央で仁王立ちする人物に目を向ける。

「どうなさいましたか陛下。御加減がすぐれないご様子ですね」

……駄目だ、すこぶる機嫌が悪い。

陛下と呼ばれた男は痛むこめかみを押さえて瞑目した。

昨日、帝国ジェヴォークスの皇帝と、サフォーデュ王国の第二王女が見合いをするはずだった。

この見合いはジェヴォークス側からの要請で、サフォーデュ側は否やも無く受け入れたものだった。

そもその発端は「変わり者陛下」「花の独身皇帝」「お子様味覚」などと、散々な言われよしの皇帝を慮った宰相を始めとする重臣達の働きによって実現した見合いの席だったのだ。

余談ではあるがこれら不名誉な渾名も宰相を始めとする重臣達の間だけのものである。国民には認知されていないと陛下に代わりここで弁明させて頂きたい。

それはさておき。

隣国の王女との見合いをすっぱかした上、飲めない酒を一気飲みし、べろんべろんになった陛下を迎えに来たのが何を隠そう目の前で青筋を立てている人物だった。

意識を無くして立ち上がることすらままならない陛下を、人目につかないように城まで運び諸々の後始末をしたのもこの人物だ。

「宰相…、もう少し小さな声で頼む」

「二日酔いですからね。それはもう頭に響くことでしょう」

宰相と呼ばれた人物は分かっているいつもの二割増し大きな声で喋っているらしい。

「楽しいお酒でしたか？」と言わんばかりの冷笑を浮かべている宰相は、とてもいい性格をしていると陛下は思う。

「陛下、本日の予定ですが」

「ああ」

午後、見合い相手の王女を伴ったサフォーデュの使者から謝罪を受けることになっている。

二日酔いの陛下が起きぬけに聞いた話によると、サフォーデュ側で何らかの不都合が発生して見合いを延期してもらいたいとの連絡が入ったそうなのだが、詳細は告げられなかったという。

だがジエヴォークス側としてもその申し出は渡りに船の状況だった為、一も二も無く飛びついた。何せ、こちらは主役の一人である皇帝が姿を消していたのだから。

抜け出したことは悪いと陛下は思っている。

対外的に考えれば、子供じみた理由で公の場を台無しにするなどあつてはならないことだと理解している。

しかしながら勝手なことをするな、とも陛下は思う。納得していない見合いの席を設けられ、内心で陛下は憤っていたのだ。

「まったく、誰の為に用意した席だと思っっているんですか」
「すまん」

「昨日はこちらも混乱していた為詳細を聞き忘れてしまいました
が、本来ならこちらこそが謝罪すべきなのです」

「悪かった」
「人の話を聞いていませんね」
「許せ」

陛下の口から反射的について出る投げやりな言葉。

そんな陛下の姿に大きなため息を吐いた宰相は、扉の前に控えている侍女に合図を送り、年下の幼馴染が好きな甘い物を用意させた。

「それで、下戸が酒を飲んだ理由は？」

部屋から人を下がらせ陛下と同じテーブルにつくと、宰相は臣下の面を外して幼馴染に戻る。

午前中は陛下の二日酔いを覚ますための休養としたことで、昨日の出来事を聞くつもりのようなようだ。

「飲みたい気分だった」

「ほう」

目を眇める宰相から隠れるように、陛下は温かい湯気が立ち上るティーカップを口元に運ぶ。砂糖をたっぷり入れた甘い味に、暫し目の前の厄介ごとから逃げてみようかと試みる。

「誰が、前後不覚に陥っている酔っ払いを迎えに行っただと思う。」

コステイの酒場でお前が飲むと言ったら一つだろうが」

逃げられなかった。

そもそもこの年上の幼馴染に嘘は通じない。生涯を通して隠したかった陛下の甘党をいとも容易く見破ったのも宰相だった。

「どこかの誰かが俺に内緒で見合いの席など設けるからな。やけ酒も飲みたくなるってものだろう」

「その話、信じると思うのか？」

氷のような冷たい視線。これは全部知っていると思って間違いな

いだろう。

皇帝御用達の酒場の主人コステイはどちらかといえば宰相に味方している、二人の共通の友人だからだ。

諦めのため息を一つ。陛下は重い口を開いた。

「…そうだよ。可愛い女の子と肩を並べて飲んでいた。これで満足か」

主に飲んでいたのは女の方だったとは、この際言わなくても良いことだろう。

「お前が、女性と？」

「ああ」

信じられないという表情を隠さない宰相は本当にいい性格をしていると思う。

陛下は皿の上に綺麗に盛り付けられている花を象った砂糖菓子を一つ口に含む。するとそれは舌の上ですぐにほろりと解け、ふわりとほのかな花の香りが口いっぱいに広がった。

ああ、美味しい。

見た目の淡い色合いに反してこの砂糖菓子は物凄く、甘いのだ。

それをぱかんと開いた宰相の口へ放り込む。途端に宰相は慌てふためいて、砂糖が入っていない己の茶で流し込む様子を見た陛下はほくそ笑んだ。宰相は相当な辛党だからだ。

「その菓子美味いだろう？最近の気に入りなんだ」

「げほっ…、…アウリス、俺に恨みでもあるのかっ」

涙目で睨む宰相に溜飲が下がる。

「とんでもない。お前には感謝している」

「…なに？」

そう、陛下はとても感謝しているのだ。

この宰相が画策しなければ昨日の見合いの席を設けられることも無かった。

見合いの席から逃げ出すことがなければ、あの店で女と出会うこともなかっただろう。

悠然と椅子に背を凭れ、肘置きに片肘をつき、長い脚を交差させる。

咽て前屈みになっている宰相を見下ろすように見遣れば、訝しむ視線とぶつかった。

「エルメル。この見合い、無かったことにしろ」

途端に見開かれる宰相の瞳。

「…理由はなんだ」

抑えた声音で宰相が問う。

見知らぬ王女との望まぬ見合いなど意味がない。

一度会っただけの女との約束を果たすため。

そう理由は多くないが一国の王女との見合いを破談にする為の材料にはならないだろうと陛下は判じ、一笑に付した。

「理由など。この俺が気に入らないんだ。…出来るな？」

身体の奥底に燻るこの気持ち。これが何なのかはまだ陛下には分からない。

己にも説明がつかないことを宰相に説明できるわけがない。今はただあの女に逢いたいと無性に思っていた。

そんな陛下の表情に何を見たのか、宰相は深くため息を吐いた。

「…よほどの気に入りをここにきてとうとう見つけたのか」

その呟きに帝国ジエヴォークスの若獅子は嫣然と微笑んだ。

いばれ話 甘党陛下と辛党宰相（後書き）

こんなやりとりを王女と再会前にやっていたよというお話。

エルメルは宰相のお名前。陛下より五つ上の30歳。

コステイは酒場の主人で陛下と宰相の友人。宰相と同じ30歳。

侍女は名前無しですが陛下と乳兄妹という裏設定有り。陛下より一つ下の24歳。

陛下以外はみんなザル。

ちなみにこの話の辛党とは酒好きのほか甘いものが苦手というオプシオンが追加されます。そういう意味では王女も辛党です。

お読み頂きましてありがとうございます！

いぼれ話 酒やけ王女とお仕置き侍女と獯猛老王（前書き）

陛下と王女が再会する数時間前の王女編です。
よろしくお願ひします。

いぼれ話 酒やけ王女とお仕置き侍女と獯猛老王

とある城のとある離宮で。

一人の女が二人の人物の前で正座をさせられていた。

足が痛い。

長いこと同じ姿勢をさせられて、女の足はとうに限界だった。もじもじと動かす度に突き抜けるような痛み。麻痺はすでに通り越し、微かな刺激でも女は身悶える。

女はこれから大事な話をしに行かなければならないというのに、脂汗を掻く女を冷やかに見下ろしている人物はとんだ鬼畜である。

そろそろ許してもらえないか。女は哀願の気持ちを込めて見上げるも、脆くも淡い期待は砕かれた。

「先方にお会いするのは午後ですから、どうぞそのままぐゅっくりお過ごし下さい。王女様」

……だめだわ、相当怒ってる。

王女と呼ばれた女は心の中でひっそりと泣いた。

昨日、帝国ジェヴォークスの皇帝との見合いに臨むためこの地にやってきたサフォーデユ国の第二王女一行だったが、警護の隙を突いて王女が姿を眩ませたのだ。

王女があまり気乗りしていない様子だと分かっているため、警備

の者たちが厳しく目を光らせていたはずの馬車から王女はまんまと逃げきつたのだ。

現在王女がさせられている正座とは遠い東の国に伝わる反省を促す姿勢であり、所謂お仕置きの真つ最中なのである。

「それで、もう一度仰つて頂けますか？」

涼やかな声で王女の前に立ち、見下ろす女性。

酒場で酔い潰れた男を店員に託した後、王女が店の外に出たところを確保したのが何を隠そうこの人物だった。

「…だからね、このお見合い、無かったことに出来ないかなって

…」

「はい？よく聞こえませんでしたわ王女様」

にっこりと笑うその背後に、地獄の門番が見えた気がした。涙目で許しを訴えるも、許してくれそうもなかった。

だがそこへ、事態を見守っていたもう一人の人物が口を挟んだ。

「侍女殿よ、その辺で勘弁しては如何かな」

「…畏まりました」

王女にとつては天の助け。いくら毛足の長い絨毯の上とはいえ辛くて堪らなかつたのだ。

喜び勇んで足を崩した王女だが、急激に動かしたことによって墓穴を掘つたのは言うまでもなかった。

テーブルを挟んで王女と先ほど助けを出してくれた人物は向かい合って座り、侍女はそんな二人にお茶の用意をしている。

王女の目の前に座る人物は、優しく王女に声を掛けた。

「して、見合いを白紙にとのことだがどういうことかこの老いぼれめに話してはもらえんかな」

穏やかな声音の軽口に釣られるように王女も心を落ち着かせる。

「老いぼれだなんて…、小父様がそう仰っていたとお爺様に知れたら大変ですわ」

「ふっふ、あ奴も儂ももう立派な年寄りよ」

「わざとご老人ぶるのは悪い冗談です」

小父と呼ばれた人物は、口元に蓄えた白髪混じりの赤褐色の髭を撫でながら笑う。

「儂の可愛いリユーディア嬢が見合いをする年頃になったのだ。儂も歳を取ったものよ」

「もう…、小父様はどう見ても年より若く見えますわ。今年で70歳などと、知っている私ですら信じられません」

侍女が淹れた紅茶を一口飲む。渋みが少なくすっきりとした味わいで、一滴果実酒が垂らされているそれがとても美味しい。それを飲みながら、王女は小父と慕う人物を見る。

彼はサフォーデュとジェヴォークスの二国と接する国境線を持つアルギレオ国の王カレルヴォ・シウルヴェステル・アルギレオという。

今年70歳を迎えるという老王は精力に溢れ、またその鍛え抜かれた大柄な身体からも年を感じさせない。年相応だと思えるのは赤褐色に混じる白髪と、顔や手に表れている皺の深さだけである。

そんな老王がこの度、親交のある二国間で行われる見合いの話を聞きつけ、自ら仲人に立つてくれたのだ。

「僕の話は今はどうでも良いのだ、嬢よ。何故ジェヴォークスの皇帝との見合いを白紙に戻したいのだ？」

「……」

「何か、言えぬ事情でもあるのか？些か意地悪な言い方になってしまつが、これは個人の話では無いのでな。三国が同時に、国家を上げて進めている話なのだよ」

老王に改めて言われずとも王女は身に染みて分かっていることだ。個人の我が儘が通るはずもない、結果が決まっている形だけの見合い。

見合いと言う名の顔合わせをしたその後、王女の返答など関係無くジェヴォークスの皇帝と結婚することになる。

「分かっています。十分、理解して……」

「昨日、何かあったようだな」

「……っ」

ふっと笑みを濃くした老王は、カップを持ち上げながら日頃から孫娘のように可愛がっている王女に笑いかける。

「この爺には何でもお見通しだよ」

ぱちりと片目を瞑るお茶目な老王に、王女は泣くのを堪えるかの

よじくしゃりと顔を歪めた。

「…なるほどな」

昨日あった出来事を洗いざらい老王に話した王女は、話の途中から感極まって涙が出ていた。目元をハンカチで押さえながら時折しやくり上げている王女を、老王は穏やかな目つきで眺めている。

いや、これは。まさに不可思議な縁もあるものよ。

王女の話聞き、訳知り顔で一人頷く老王。

「泣くな、嬢。これから坊に会うのだろうか？泣き腫らした顔で会っては嬢の魅力が伝わりきらんぞ」

老王は対面の席から王女の隣に移り、優しくその黒髪を撫でる。全くこの王女様は幼い頃から泣き虫だ。王女を生まれた頃から知っている老王は、変わらぬ王女の姿に愛おしさを感じる。

「ですが小父様…、私、わたし……っ」

国を思う気持ちと昨日出会ったばかりの男に抱いた思いの間で苦しみ、震える王女の背にそっと手を当て老王はぼんぼんと幼子をあやす様に軽く叩く。

「大丈夫、儂に任せておきなさい。決して嬢に不利なことにはさ

せんよ。とりあえずは昨日の詫びだけはしっかりとするのだ。白紙の件は、その次だな」

「小父様…っ」

「儂が、嬢に嘘を吐いたことがあったかな？」

「いいえ…」

「ならば、儂を信じることだ」

途惑い顔で視線を泳がせた後こくりと小さく頷いた王女に老王は満足げに頷き、優しく胸に王女を寄り掛からせ、暫し落ち着くまで胸を貸していた。

そして、王女に見えないところで老王は嗤う。

さて、ジェヴォークスのひよっこよ。俺の可愛いリユージェイアを泣かせた罪、どのようにして責任を取らせようか。

かつてアルギレオの獅子王と呼ばれた老王は、腹の内ではひっそりと報復の算段をしていた。

いぼれ話 酒やけ王女とお仕置き侍女と獐猛老王（後書き）

王女側ではこんなやりとりが、というお話でした。

老王は王女の祖父（前々サフォーデユ国王。71歳。存命中）の悪友で、リユーディアが大好きな筋骨隆々おじいちゃん（70歳）です。王女も老王が大好きです。（あれ、二人は両想いか…？）

現在実の娘のように王女を見守りますが、王女が生まれた時に老王は奥様に先立たれていて半ば本気で嫁に欲しがったという裏設定があります。そして王女の祖父と大喧嘩してそこでまた一つの物語が…。（有りません）（有りました。番外編として掲載してます）

侍女は王女の乳姉妹で王女より数か月早く生まれているためお姉さんです。23歳。王女に酒を教えたのもこの侍女です。書いていてあまり出張ってくれなかったのが残念でした。せつかくサブタイトルにも組み入れたというのにつ。

そして陛下側の侍女と区別するの忘れていた…っ！申し訳ないです。

老王は王女が酒場で出会った男が陛下だと気づいたご様子。仲人さんですから互いの情報はばっちり掴んでいるので分かったという感じでしょうか。

そして王女の前では猫かぶり。本性は百獣の王でした。こんなおじいちゃん、好きです。

お読み頂きましてありがとうございます！

いばね話 甘党陛下と酒やけ皇妃と夢見る友人（前書き）

陛下と王女が結婚して、しばらく経った後のお話です。

皇帝と結婚したので王女から皇妃になりました（m | | m）
よろしくお願いします。

こぼれ話 甘党陛下と酒やけ皇妃と夢見る友人

とある城の一角にある執務室の中、陛下は忙しく政務に明け暮れていた。

この一山を越えればしばらくはゆっくり出来る。その思いを支えに筆を走らせる。

だがそこへ、皇妃付きの侍女が火急の知らせを告げに来た。

「恐れながら陛下。リユーディア皇妃様がまた…」

皆まで言わずとも伝わるだろうと侍女はそこで言葉を切る。

書類から顔を上げた陛下は、不機嫌な顔をそのままに手に持っている書類を机に投げ出す。

「またか。あいつめ…」

皺が寄る眉間を揉み解し、色とりどりの飴が盛られた小皿から牛乳味を選び口に放り込む。

休養までもうすぐの辛抱だというのに、じっとしていられないのかあいつは。

いつもは嘗めきるまで口に含んでいるが、陛下の今の心情を現すかのようにガリッと飴を噛み砕いた。

「…で、今日はどのように？」

侍女に成りすましたか、護衛を言い包めたか、庭の草花の手入れ

をすると言ったか…。

思いつく限りの皇妃の所業を苦い表情で思い浮かべる。

「……テラスから、木を伝ったご様子で」

「あの馬鹿っ！」

驚きを隠しきれずに悪態を吐くと、侍女がびくりと肩を揺らしたのが分かり思わず舌打ちをする。

「悪い、お前に言ったわけじゃない」

「…いいえ、私が御側についていながら、申し訳ございません」

「木を伝って下りるなど、誰が考えるものか。…コステイへ使いを出せ。あのお転婆が来たら首根っこ捕まえて一滴も酒を飲まずなと伝える」

侍女が深く腰を折って礼をして退室した後、陛下は深く椅子に座り直して天を仰いだ。

お願いだから無理はしてくるな、と深く息を吐き出した。

開店前の酒場で、二人の男女が何やら話をしている。

「…皇妃様。ここにはあなたに飲ませられる酒はこれっぽっちも無い」

ふつつとカウンター越しにいる皇妃に煙草の煙が行かないように吐き出すと、まだ吸い始めて半分も経っていないそれを灰皿へ押し付けた。

「お願い！もうコステイさんに頼むしかないの！」

「聞けないお願いだね」

目にかかるほどの長い前髪を鬱陶しそうに掻き上げた酒場の主人コステイは布巾を片手にグラスを磨いていく。

話はこれで終わりと打ち切ったつもりだったが、皇妃はそうではなかった。

「真面目に聞いてくださいよ！アウリスにもう一か月も酒断ちさせられてるんですよ！ひどいと思わない？」

いつだったか聞いた覚えのある皇妃の台詞回しに、酒場の主人は横目で皇妃を見る。

あの時はまだ少しのあどけなさが残る顔立ちをしていたように思っていたが、今では愛し愛されて美しく成長した大人の女になっている。変わっていないのは酒やけ声くらいか。

まあなんだ、あいつもやれば出来んじゃないかねえか。

目の前の皇妃の夫となった、かつて女性が苦手だった年下の友人を思い酒場の主人は目を閉じて口元だけで笑う。

「コステイさん、聞いてる？」

「おーおー、お嬢さんもやれば禁酒出来んじゃないかねえか。その調子で頑張れよ」

「そうじゃなくて！」

ムガーと怒る皇妃はまさに駄々を捏ねる子供のような。

適当にあしらって拭き終わったグラスを戸棚に戻した後、自然に煙草を探ろうと手が動くが吸えない事情を思い出して次のグラスを持ち上げた。

キュ、キュ。

時折光に透かして汚れが付いていないか確認してまた磨く。割れないように優しく丁寧に。

酒場の主人の手によって次々とグラスが一点の曇りも無く磨かれていく様子を、皇妃はじっと見つめている。

「…なんだよ」

黙って見ていられるのは居心地が悪い。こと皇妃は喋っていないと息が吸えないのではないかというくらいに喋る時は喋り倒すのでこの沈黙がどことなく不気味でもあった。

「綺麗に磨くなあって思って…」

うつとり、というように酒場の主人の手の中にあるグラスを見つめる皇妃。その心は「そのグラスで飲む酒は格別なんだろうな」であることは間違いない。

「大事な相棒達だからな。相棒の顔を綺麗にしてやるのも主人の務めさ」

手を抜くわけにはいかない、と独特の切れ込みが彫刻されたグラスを酒場の主人は掲げる。

この酒場のグラスは揃いの物や一点物もあり、戸棚の中は様々な表情のグラスでいっぱいだ。

「…なんだか恋人を扱うような手付きだよな」

「皆それぞれ惚れこんで買い付けた物だからな。あながち間違っ
ちやいないぜ？」

「冗談めかして笑った酒場の主人に、皇妃は何とも言えない表情に
なった。

惚れ込んだというのは嘘ではない。一つ一つ見つけた時の情景は
すぐ思い出せるし、このグラスにはどの酒が良いかと考えるのもま
た楽しい。

「まさか…名前とか付けてないよね？」

「おお、麗しのジユリエッタ」

「きゃー！」

酒場の主人の芝居がかった仕草に、皇妃は腹を抱えて笑った。

一頻り笑い他愛もない話をした後、酒場の主人に酒の入っていない
飲み物を作ってもらった皇妃は渋々それを飲んでいた。

「物足りないよ」

「それで満足しろ」

「コステイさんは飲んでるじゃない！」

「俺は煙草が吸えないイライラを紛らわせてるだけだから」

開店前に酒場の主人が酒を飲むのは珍しく、また煙草を吸わない
というのも非常に珍しいことだった。

「禁煙してるの？」

「それをお嬢さんが聞くかね……」

きよとんとする顔で聞いてくる皇妃が小憎たらしい。

酒場の主人はカクテルに添える果実を齧り、募るイライラを沈めようと努力した。

早く迎えを寄越せ馬鹿野郎。そう心の中で呟いて。

と、その時店の扉が開く音がした。

入ってきた人物に「よう」と目を細める酒場の主人と「げっ」と声を漏らす皇妃。

そこに居たのは、爽やかな笑顔を貼り付けたこの国の皇帝だった。

「待たせてすまん。こいつをしっかりと捕まえておいてくれたようだな」

こいつ、と言いながら陛下は皇妃の首根っこを押さえる。

「遅えんだよアウリス」

「そう言っな、これでも急いで終わらせてきたんだ。…リユーデ
イア、構ってやれなくて悪かったな？」

皇妃の耳元で意図的に甘い声音で囁く陛下は、口は笑っているが目は笑っていない。

「べべ別に構って欲しかったわけじゃ……！」

「そうかそうか寂しかったんだな？……それで、木登りは楽しかったか？」

あつあつと言葉に詰まらせる皇妃ににこやかに笑って見せる陛下のこめかみに浮かんでいる青筋を、酒場の主人は見逃さなかった。この皇妃が寂しいという理由だけでここに来る訳がないのは陛下も分かっているはずで。それよりも木登り、という不穏な言葉が聞こえたがこの皇妃様は一体何をしでかしてくれたのか。万が一落下するようなことがあれば大惨事だ。

怒れる陛下の手からじたばたと逃げ出そうとする皇妃は同情の余地もないと、酒場の主人は追いやるように手を振る。

「一滴も酒を飲ませてないし、煙草の煙も吸わせちゃいねえ。そろそろ俺が限界だからとつとと連れて帰れよ」

「言われなくても」

そう言って、陛下は引きずるようにして皇妃を連れて店を後にした。

一人残された酒場の主人はこの後の展開を予想し肩を竦めてみせる。

「…それにしても、なんであのお嬢さんは気づいてねえのかな」

胸ポケットから取り出した煙草に火を点け、肺の奥深くまで吸い込む。くらりと来る濃厚な味を堪能し、ふうつと吐き出した。

「アウリスがお嬢さんに酒を飲ませないのも、俺にお嬢さんの前で煙草を吸うなって言うのも、全部全部お嬢さんの為なのによ」

そう遠くない内に皇妃自身も気づくだろうが、それにしても鈍い。今後、皇妃の飲酒が解禁になるのは1年ほど先のことだろうか。

酒好きの皇妃には少し酷な話だが、こればかりは我慢してもらえない。

酒場の主人は真っ赤に色づいた林檎を一つ手に取り、未来の二人の姿を思い浮かべる。

きつとこの林檎のような丸々とした赤子を、皇妃は幸せそうにその腕に抱いていることだろう。

また、そんな妻と子をあの甘党陛下がそれこそ蕩けるような目で見ることだろう。

そんな様子が容易に目に浮かぶ。自然と笑みがこぼれる酒場の主人は煙草の灰を灰皿へ落としてから林檎の皮を剥き始めた。

果物を使って、酒好きの皇妃のために彼女が好みそうな飲み物を考えてやろう。酒は入れられないが、口慰みにはなるだろう。きつと酒欲しさに何度も逃げて来るに決まっているのだから。

酒場の主人は楽しそうに鼻歌を歌い、いずれ訪れる友人夫妻の幸せな未来を思い描くのだった。

こぼれ話 甘党陛下と酒やけ皇妃と夢見る友人（後書き）

酒場の主人ことコステイさん参戦。

彼は酒と煙草が似合う男だと思います。いい兄貴分。

そしてご懐妊を当の皇妃様だけ知らないとかそんな馬鹿なというお話…っ。

きっと陛下が意図的に伝えてないのです。いつ気づくのか面白そうだという理由で。最低だな陛下。…そんな陛下にしているのは私です。面目ない。

このこぼれ話をもって、甘党陛下と酒やけ王女の話は終わりになります。

二人の話を最後まで読んで頂きまして本当に本当にありがとうございます。

伝えきれないほどの沢山の感謝をお読み頂いた皆様に！m（）（）

m*（）

番外編 孤独な獅子王と泣き虫虎王（前書き）

前話で最終と言っておきながら、恥ずかしながら戻って参りました。今回のお話は王女の祖父と老王の昔話です。王女の祖父視点のお話です。

よろしく願います。

番外編 孤独な獅子王と泣き虫虎王

我が国サフォーデュは今日も平和だ。

晴天に恵まれたこの良き日に祝いに駆けつけてくれた悪友がその一言を言うまでは、とても平和だった。

「嫁にくれ」

物心つく前からの付き合いをしている悪友が、狂った。

「…誰を？」

「リユーディアを」

リユーディアとは、今現在悪友の腕の中にいる俺の孫娘のことだ。

「…冗談だろう？」

「本気だ」

真顔で言い切るのはいが、…いいや良くない、決して良くないが、その本気はちょっとどころじゃなくかなり危険だぞ。

「まずは落ち着こう。落ち着いてリユーディアを返すんだ。それから話を聞こうじゃないか」

嫁に欲しいと言われた孫娘が、言った張本人の悪友の腕の中にいることがかなり不安だった。すやすや寝ている顔も可愛いぞ、さすが俺の孫。だがその腕の持ち主は危険だから早く起きなさい、早く！

孫娘を寄越せと腕を広げて受け入れ態勢を整えたのだが、悪友は首を横に振った。

「嫌だ」

「子供か！いい歳したおっさんが何言ってやがる！！」

「お前よりは下だろう」

「1歳だけな！47にもなって何をとち狂ったことを…っ」

そうなのだ。悪友は47歳。絶賛中年期真っ最中のおっさんが、何を血迷ったのか求婚しようとしているのは昨日産まれたばかりの0歳児。まだ目も開いていない赤ら顔のサフォーデュ国の王太子第二息女であり、俺の可愛い三人目の孫だ。

「…駄目か？」

こてんと小首を傾げる中年男の姿に棒読みでも「わあかわいい」などと口が裂けても言っちゃらんし「良いよ」などと死んでも言えるわけがなかるうが。

アルギレオの獅子王と謳われる悪友の威厳はどこにいった。

「駄目だ。というかお前がダメだ。色んな意味でダメダメだ」

「そんなに駄目か」

「駄目だ」

むう、と口を尖らせる中年男。そこでお前が不機嫌になるのが俺には分らん。

「とりあえずリユーディアを返せ」

「嫌だ。…こんな可愛くて小さな生き物を動かしたら潰してしま
う」

「小さな生き物つてお前。∴ ああはいはい、そういう意味で「嫌だ」なんだな。了解」

孫娘が腕の中で大人しくしているのですっかり忘れていたが、悪友はかなりの馬鹿力なのだ。

「じゃあ受け取りに行くから動くなよ」

先ほどからじつとその場を動かずにいた悪友に近づき、腕の中からそつと寝ている孫娘を抱き上げる。悪友の腕から離れて俺の腕に渡る時に火が点いたようにむずがったが、後ろに控えていた乳母に素早く渡したら落ち着きを取り戻したようだった。……おじいちゃん泣いて良いかな？

「お前が泣くなよ」

「泣いてねえよっ」

子供を抱き上げるともれなく泣かれると評判のサフォーデュの虎王ことヴァルト・ルーカス・サフォーデュは心の中で涙して、悪友を連れて隣室へと移動した。

「で、なんでリユーディアを嫁に欲しいんだ。まだ産まれたてほやほやだぞ」

手酌で酒を飲み、悪友の空いたグラスにも注いでやる。共に酒豪で鳴らし、俺はすぐ顔が赤くなるが悪友は顔に出ない。涼しい顔し

やがってこいつ。ぐいぐいと酒を呷った俺はすでに真っ赤だった。

「…俺とて、独りは淋しいと感ずることもある」

悪友がぼつりと漏らしたその言葉。

その遠くを見る視線の先に、彼女の姿を捉えているのだろうか。

「……エレオノーラ」

この名前はかつて悪友の妻だった女性の名だ。

俺がその名を出した途端に悪友の瞳が揺れ、自嘲気味に口元が歪んだ。…そんな笑い方をする奴ではなかったのに。

「お前、まだ、引き摺っているのか」

ゆるゆると首を振り、「違う」と悪友は言った。

「ノーラが亡くなってもう15年だ。共に過ごした時間よりも長い時を独りでいれば思いも薄れてくる」

だが次の妃を娶らず独りであるということが、亡くなった彼の妃のことをいつまでも忘れられずに引き摺っているということに他ならないのではないか。

そんな俺の眼差しに悪友は苦笑し、何も言わずグラスを傾けた。

隣国アルギレオの王である悪友には、世継ぎがない。

悪友カレルヴォと彼の妃エレオノーラが結婚したのは20年前。

仲睦まじい二人の間にいつ悪友そっくりの子が拝めるかと期待して

いたが、二人は長らく子に恵まれなかった。そして子を儲ける前に彼の妃は突然病に倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。

国や王族という垣根を越えて家族ぐるみの付き合いをしていただけに、訃報を聞いた時は信じられない思いだった。俺でさえ悲しみを堪え切れず嗚咽したのだ。悪友の心内は如何ばかりか計り知れない。

以降を独身で通している悪友にこのまま本当に独りで生涯を終えるつもりなのではないか、と危惧した俺は自国で夜会を開催する度に悪友を招いた。

様々な女性を紹介し、少しでも気に入りが見つければ良いと思っていたが結果は芳しくなく、俺の息子夫婦が此度3人目を儲けて俺が祖父となつて久しい今でも、悪友は独りのままなのだ。

いつしか沈黙が支配した部屋の中で、俺達は淡々と酒を酌み交わしていた。

と、そこへ孫娘の元気な泣き声が隣の部屋から聞こえてきた。ああ、泣き声もなんと愛らしい、さすが俺の孫。悪友には悪いが爺馬鹿な俺はにんまりする表情を抑えることが出来ない。

それに気付いたのか悪友が突然笑い出した。

「なんだよ」

「いや、お前が羨ましいと思ってな」

そんな言葉、今まで聞いたことがない。

俺に子供が生まれた時も、初孫が生まれた時も、悪友は一度として「羨ましい」とは口にしたことが無かった。俺は驚いてまじまじ

と悪友を見つめてしまった。

「本当に羨ましいよ。お前の家族はいつも賑やかだ」

「カレル……」

「お前の国に来ると淋しさというものを思い出す。生まれたばかりのリューディアを見たら特に強くそう思ったよ。…そんな感情は15年前に置き去りにしたと思っていたんだがな」

悪友の空っぽな笑顔。だが今にも泣き出しそうな顔で笑う悪友に、なんで笑うんだよ、泣けよ、と思う。

15年前もそうだった。彼の妃の葬儀で泣きそうな顔をしているのに、無理やりへたくそな真顔を貼り付けていた悪友の顔を思い出す。

あの時から悪友は、様々な感情を置き去りにしてきたのか。俺にも何も言わずに一人で抱え込んで。

なればこそ。思う存分泣いて、そこを乗り越えろよ、と強く願わずにいられない。

「……お前が泣くなよ」

「な、いてね、えよ、っ」

泣けと強く願い過ぎて涙腺が決壊した俺に、悪友がハンカチを渡そうとしたが断った。

ぐしぐしと涙とそれ以外の液体を袖で乱暴に拭い、新しく開けた酒瓶を直に口につけて呷った。ごくごくと一気に半分程飲み下し、瓶を悪友の胸に突き付ける。

「カレル！ 飲め！」

「いや、お前と間接接吻はちょっと…」

「良いから飲め！飲んで酔え！そして泣け！胸は貸してやる！」

「ヴアルト、お前こそ珍しく酔ってるんじゃないか？」

「黙れっ」

ぐいと隣に座る悪友の赤褐色の頭を鷲掴んで強引に引き寄せせる。

勢いが付きすぎて肩口に激突した悪友のうめき声が聞こえたがこの際些末事だ。俺も痛いんだからお相子だこの野郎。

「泣けよカレルヴォ。存分に泣いて、心から笑え。俺が隠してやるから王の矜持など今この時だけ忘れちまえ」

一瞬、悪友の身体が強張った。弱みを見せることを良しとしない悪友の性格を思えばこいつは泣かないだろうということも分かっている。

だが胸の内に澱む思いを吐き出す場所があるのだと、この年下の親友に知らせたい。

「エレオノーラのことは忘れろとは言わん。だがいつまでもそこにいたら、彼女は悲しむと俺は思う」

俺の記憶している彼の妃は、自分の夫が真つすぐに国の未来を見据えている姿を見るのが好きだった。常に民の先頭に立ち敢然と導く姿からいつしか獅子王と呼ばれるようになった悪友を、一番喜んでいたのも彼の妃だった。

「立ち止まるなよ獅子王。きっと彼女もそれを願ってる」

俺も、そう願っている。その思いを込めて、俺よりも体格の良い身体をきつく抱きしめた。

悪友が震える息を吐いた。泣けと言われても素直に泣かないだろうと思っていた悪友が、静かに涙を流した。雄々しく、常に泰然自若としている悪友が身を縮こまらせ肩を震わせて泣いている。

15年も押し込めてきた感情が涙となって止めどなく溢れている、そのことに、俺も泣きそうだ。

だが声を出さずに泣く悪友は、本当に意地っ張りだ。俺ならば声を上げて号泣しているところだぞ。してもらい泣きなんか冗談じゃない。これはただの塩水だ。心の汗だ。

俺はいつの間にか、男泣きに泣いていた。

そろそろ中年男同士でこの体勢は視覚的にきつい、色々やばいむさい、と思い始めた頃、俺の肩口に頭を乗せたまま悪友が話しかけてきた。

「なあヴァルト」

「…なんだよ」

まだぐずぐずと鼻を鳴らしている俺と比べ、悪友はもう落ち着いているようだ。解せん。

だが悪友の次の言葉で俺の鼻水も引っ込んだ。

「やっぱりリニューディアを嫁にくれ」

「「やっぱり」の意味が分かんねえ」

「あの子さ、似てる気がするんだ。ノーラに」

「……産まれたての赤子にエレオノーラ要素は皆無だと思っぞ？」

どう思い浮かべても孫娘と彼の妃の似てる要素が見当たらない。強いて言えば黒髪のところか。そういえば三人の孫で黒髪は一人だけだ。……まさか。

「お前……、髪が黒いだけで似てるって？」

「ああ。あの子は将来可愛くなるだろうな。お前にも似て賑やかだと尚良い。俺が手取り足取り慈しむんだからそれはもう輝くばかりに……」

ぱつと悪友を身から引き剥がして掴んだままの悪友の肩をがくがくと揺らしてやる。

「黒髪の妙齢の女性を今すぐ用意してやるからリューディアをそんな目で見るとねえ！あの子はまだ昨日誕生したばかりなんだぞー！！」

見るとしても「嫁」ではなくて「娘」くらいで勘弁してほしい。俺にとつては孫だが子供のいない悪友に「孫」として見るとは言わないから。

「お前の子供は息子一人だったし、孫は男一人女二人なんだからリューディア一人くらい良いじゃないか」

「リューディアは物でも愛玩動物でもねえんだよ！笑えと言ったがいやらしい顔で笑うなっ、目を覚ませこの野郎！！」

先ほどまでの雰囲気をぶち壊す悪友に「そういえばこいつはこういう奴だった」と思い知らされる。15年前から鳴りを潜めていたが、悪友は少しばかり自己中心的な性格だった。

「あの子を見た瞬間、感情というものを思い出した。ノーラがいなくなつて初めてのことなんだ。…頼む」

「だからって無理だ、諦める。歳の差を考える馬鹿。リユーディアが成人するまでにお前がこの世にいるか分からないんだぞっ」

47歳差という途方もない数字に俺は眩暈がする。リユーディアが成人する年に悪友は67歳だ。67だと！？幼な妻にも程があるだろうが！！

「俺が67歳で20歳の嫁か。なにやら興奮す…」

「黙れ猛獣っ！リユーディアは絶対にやらん。そしてその考えを改めない限り国境線を越えることは許さないと思え！！」

こうして、サフォーデュとアルギレオの間で『謎の一年戦争』と後に呼ばれる冷戦が勃発した訳だが、今回のことで色々と吹っ切れた悪友がちゃっかり年の離れた可愛い黒髪の嫁さんを見つけてしかも懐妊したと聞き、ひっそりと終戦を迎えることとなった。

全く、最初はどうなることかと思つたがこれで生きている内に悪友に似た子を拝むことが出来そうだ。もっと早くに泣かせてやれば良かったかと思つたが、過ぎたことだ。彼の妃もこれで安心して眠れることだろう。

長い足踏みしやがって、今度うちに来る時は家族三人で美味しい酒を持ってきやがれてんだ。

長々とアルギレオ国の使者から脚色された悪友の恋物語を聞きな

がら、俺の腕の中にいる少しばかり大きくなった命の重さを堪能する。

俺の可愛い孫娘。お前の操はおじいちゃんが守ったよ。

だから抱き上げる度に泣かないでおくれ。おじいちゃんは泣きそ
うだよ！

「…国王陛下、涙をお拭き下さい」

隣に控えていた宰相の差し出したハンカチを固辞して、俺は咆哮
を上げる。

「泣いてねえって言ってんだろっ！」

今日もサフォーデュは、平和だ。

番外編 孤独な獅子王と泣き虫虎王（後書き）

最終話といった舌の根も乾かぬうちに舞い戻って参りました…っ。
獰猛老王のリユーディアに対する求婚話が突然ぼんと浮かんだので
急いで形にしてみました。年内に間に合ってホッとしています。

以下補足。

獅子王⇨老王（話中では悪友）⇨カレルヴォ・シウルヴェエステル・
アルギレオ47歳

虎王⇨酒やけ王女の祖父⇨ヴァルト・ルーカス・サフォーデュ48歳

虎王は20歳の時に出来ちゃった婚で早くに子供を儲けまして、虎
王の一人息子さんは話中では28歳で3人の子持ちです。そのうち
の一人が酒やけ王女です。

獅子王は27歳の時にご結婚なので虎王と比べるとちょっと遅いで
す。奥様を亡くしたのは32歳の時。48歳で再婚して子供も儲け
た獅子王は、こぼれ話登場時70歳でもまだ王位を移譲していない
設定です。

…たぶん話にズレは無いかと思います。（追記：王女の祖父をいく
つか父と表記していた部分があり直しましたすみません！）

中年男達のむさ苦しいお話で申し訳ありませんでした。中年男も好
物です（スライディング焼き土下座）

こんな風に突然ぽつと話が思い浮かんだらまたこっさり掲載したい
と思います。(m _ _ m)

お読み頂きましてありがとうございます！

甘党陛下と酒やけ皇妃と雪見酒（前書き）

二人が結婚した後のとある冬の一幕です。
よろしく願います。

甘党陛下と酒やけ皇妃と雪見酒

「ねえ」

「なんだ」

「…寒いんです、けど」

「我慢しろ」

もぞもぞ、ごそごそ。

重なるように寄り添う影が二つ、白い息を吐き出している。

「…ねえ」

「だから、なんだ」

「…寒いっ」

「我慢しろと言ったばかりだぞ」

「寒いし、首も痛いっ」

「…自分が見たいと言いつ出したくせに」

重たそうな雲が垂れ込める暗灰色の空。

それが一望出来る城の屋上で甘党陛下と酒やけ皇妃はそれぞれ厚い毛布に包まりながら空を見上げていた。

「ここまで寒いとは思わなかった!」

「俺は慣れているが…、お前の国と比べるとこの国の冬は少々厳しいか」

皇妃の生国であるサフォーデユは四季を通して温暖な気候で、皇妃はあまり寒さというものに慣れていない。反対にここジエヴォークスは四季がはっきりしている国であった。皇妃は生まれてから一度も見たことが無いという雪をジエヴォークスへ嫁いだお蔭で見られると密かに楽しみにしていたのだ。

そして二人が婚儀を挙げてから初めての冬。皇妃が「雪が降り出すところを見たい」と言い出して、現在寒さに震えながら屋上に敷いた絨毯の上で二人は寄り添い合っていた。

陛下は水筒に入れてきた温めた葡萄酒をマグに注ぎ、皇妃に「飲め」と差し出した。

「わわ、ありがとう！……くう〜っ、温まるう」

淡黄色の手袋を填めた手で受け取り湯気を放つ葡萄酒を一口飲むと、香辛料が効いていてぽかぽかと温まる。身体が温まったことでより一層濃くなった白い息を楽しみながら皇妃は温かな葡萄酒を美味しそうに飲んだ。

皇妃が吐き出すもわもわとした息がまるで綿菓子のように、と陛下は自分用に持ってきた熱くて甘い紅茶を飲みながら笑む。

「飲み過ぎて見逃すなよ」

「んんっ」

つつい酒に気を取られてしまった皇妃は慌てて傍らにマグを置き、せつかく温まった熱を逃がさないようにとしっかり毛布を巻き付け直して空を見上げた。

今にも降り出しそうな曇天。しんと気温が下がってきているのが露出している肌からも、そしてじわじわと染み入るように毛布

越しからも感じられる。

もうすぐ雪が見られるという思いがふるりと体を震わせたのを隣に座っている陛下にも伝わったのか、紅茶の入ったマグを置いて陛下が声を掛けた。

「リユーディア、こっちへ」

陛下は耳や頬や鼻の頭を赤くさせながら見逃すまいと力む皇妃に己の毛布を持ち上げて「入れ」と促す。途端にぼんつと顔全体を赤らめた皇妃がわたわたしながら陛下とは反対側の絨毯の端っこへ行ってしまった。

「…おい、何故そっちへ行く」

陛下が毛布を持ち上げたままの姿勢で咎めるように問えば、

「べべっ、別に寒くないから！」

皇妃は「お酒を飲んで温まったから大丈夫！」と毛布で頭まですっぽり隠れてしまった。

「…いつになったら慣れるんだお前は」

「な、慣れなくても私は構いません！」

俺が構う、と丸まっている毛布の塊に近寄った陛下は己の毛布を掛けてしっかりと抱き寄せた。

「んぎゃっ」

毛布の中から聞こえる色気の欠片もないくぐもった悲鳴に陛下は肩を揺らして笑う。

「少しは可愛く鳴けないのか」

「なく」って何!？」

春に婚儀を挙げた二人が冬に至るまで少なくない数の触れ合いを重ねているのだが、一向に皇妃は慣れることが無い。そのいつまでも新鮮な反応が可愛くて面白い、と陛下は悪戯な心が擡げる。まったく、どうしてやろうか。

「冷えてきたな」

陛下は抱き寄せている毛布に包まれた皇妃の身体を右腕でよりしつかりと抱き込んだ。

酒と羞恥で高くなっている皇妃の体温が伝わりとても心地よい。まるで湯たんぽのようだ。

言葉にしなくてもそれは皇妃にも伝わったようで、毛布越しに小突かれた。

「離れてよっ」

「こうしていた方がお互い暖が取れて良いだろう」

「私は良くないわ!」

ぐいぐいと毛布越しに陛下の身体を押しやろうとしているつもりなのだろうが、いかんせん防御のための毛布のせいで身動きが取れないのは皇妃の方。その抵抗は微々たるもので、全く意に介さない陛下はいつもの意地悪な笑みを浮かべて抱き寄せた毛布の塊に顔を寄せた。

「それよりも、いつまでそうしているつもりだ？」

毛布越しの皇妃の耳元に唇を寄せて「そのままでは雪が見られな
いぞ」と囁く。押し付けるようにして唇の動きを伝え、さらに顔を
赤くさせているだろう皇妃を想像しながら出ておいでと促した。

「~~~~ツ!!」

言葉にならない悲鳴を上げ、なおも固く閉じこもった皇妃にふむ
と少しの間考えた陛下は「あ、」と声を上げた。

「降つて来たぞ」

「…ええ!？」

がばつと毛布から顔を出した皇妃が「どこどこ?!」と辺りを見
渡すと、陛下は「ほら、こっちの方だ」と指を指す。

その指し示された方向に吸い寄せられるように身を乗り出せば、
自然と陛下と密着するのだが皇妃はまだそのことに気付かない。

単純な手に簡単に引つ掛かる皇妃にこれで良いのだろうかと少々
呆れも混じるが、せっかく獲物が出てきてくれたのだから逃す手は
無い。ひっそりと笑む陛下はさらに「こっちだ」と誘った。

「どの辺り? 見えないけど」

陛下の太腿に左手を置いて乗り出した皇妃の好奇心に輝くその横
顔が、陛下に近づく。

皇妃からふわりと先ほど飲んでいた葡萄酒の香りがする。陛下は
そのほのかな香りに惹き寄せられるようにして、ちゅ、と皇妃の唇
の端に口付けた。

「甘くないな」

唇を押し付けたまま残念そうに言った陛下は、皇妃が反応する間もなく腕を回して拘束し、そのまま膝上に座らせた。

「捕まえたぞ」

同じ方向を向いて座らせた皇妃の脇腹から腕を通してぎゅうと抱きしめた。

お互い厚手のコートを着ているが皇妃の背と陛下の胸が密着してそこから新たに熱を生み、毛布でその熱を止まらせる。

先ほどの毛布の塊を抱き寄せた時よりも暖かいと思うのは、全身で感じる皇妃の柔らかさが原因だろうか。陛下は固まっている皇妃のつむじに口付けを落とした。

「……………騙された」

皇妃の呆然とした呟きには返事をせず、抱きしめた格好のまま陛下は器用にマグに注ぎ直した紅茶を優雅に口元に運ぶ。

「初めからこうしていれば良かったな。暖かさが段違いだ」

その言葉にハッと意識が戻った皇妃が頬を染めながら低く唸る。

「だから私は湯たんぽじゃないって…」

「お前からすれば俺が湯たんぽだろう」

毛織の襟巻を巻いている皇妃の肩に顎を寄せながら言う。陛下の

髪が耳を擦ったのか皇妃はぴくりと身を震わせた。

何かを言いかけたが途中で諦めたように背を預けた皇妃は、新しく注いでもらった葡萄酒をふてくされた面持ちで飲んだ。

事実、とても暖かい。包み込んでくれる陛下の体温と混ざり、一人で毛布に包まれているよりも暖かった。

背後にいる陛下の表情は皇妃には見えないが、大人しく背を預けたことで脂下がった表情をしているだろう陛下のことを思うといまいち面白くない。どうしてくれようかと思いついた矢先、またも陛下が「あ、」と声を上げた。

「見て見る。降ってきたぞ」

もうその手には乗らないぞと思いつつも空を見上げてみれば、暗灰色の雲から白いものがゆっくりと舞い降りてきていた。

皇妃が初めて目にするその光景は、幼い頃に兄妹で羽根枕を投げて遊んだ時の記憶を思い出させた。

「…天使」

皇妃がぼつりと呟いた。

部屋いっぱいには舞い散る白い羽根。「まるで天使の羽ばたきのようね」と笑い合った懐かしい思い出。

今まさに空から天使の羽根が次から次へ舞い降りてきている、と皇妃は深い感動を覚えた。

目の前に降りてきた綿のような雪を毛布から出した手で受け止める。手袋に降りた雪はとても軽く、本当に羽根のようだった。

「ほら」

陛下が差し出したのは己の黒い手袋。その手のひらに乗った一片の雪だった。

「目を凝らして見ると良い。雪の結晶が見えるぞ」
「結晶？」

言われてじっと見つめると、ただの白い塊と思っていたそれが綺麗な模様の六角形をしていることに気が付いた。

「綺麗……」

まるで宝石のようなそれに見入りその美しさに息を吐くと、結晶はほろりと形を変えてしまった。

「あっ」

「ごく小さな氷だからな。すぐに溶けてしまう」

残念そうな声を上げた皇妃に、陛下はすぐ次の結晶を見せてくれた。

「雪の結晶は一つとして同じ形は無いそうさ。さっきのと形が違うだろう？」

「不思議」

「ほら、ここにも付いている」

皇妃の黒髪の一房を掬い取り、そこに付いた雪を見せる。

「お前の髪色は漆黒だから、雪がよく映えるな」

恥ずかしげもなく髪に口付ける陛下に、何も言つまいと皇妃は心に秘めた。

「さて、これ以上は凍えてしまうから戻るとしよう」

ぱたぱたとお互いの身体に付いた雪を払い落して身支度をする。二人の時間を邪魔しないようにと遠くで待機していた侍女や侍従たちが後片付けをし、陛下は湯殿の用意を申し付けた。

「…雪つて、綺麗ね。すぐに溶けてしまわない？」

皇妃が空を見上げながら名残惜しげにそう聞けば、陛下はいやいやと難しい顔で首を横に振った。

「この降りだとあつという間に積もる。それに綺麗だなんだと言つていられるのは今の内だぞ？今年から冬は覚悟することだな」

「覚悟つて…」

「考えられないだろうが、直に降り積もつた雪が高く分厚い壁となつてこの国を覆う。人の身長の一倍感の壁が冬の間中ずっと聳え立つんだ」

雪は恐ろしいぞ、と言われても皇妃には想像が出来なかった。この儚く脆い繊細な雪からはそんな恐ろしさを到底感じられない。

「雪かきをして必要最低限の道は作るが、気軽に外出は出来なくなるしな。冬の間は城に閉じ籠ることになる」

「ええっ！城下に下りられないの？」

「民も冬場は家に閉じ籠る。冬に働かなくても済むよう、その為に日々蓄えをするんだからな。俺も冬場はそれ程忙しくないし、酒場とて例外じゃないぞ」

「そんなあ」

あからさまに肩を落とす皇妃に「けれど楽しみが無いわけじゃない」と楽しげに陛下は笑う。

「何々？」

「冬の間は家にいる時間が多くなるわけだが、そうすると家族と過ごす時間も多くなる」

皇妃の肩を抱き、暖かな城内へと歩を進める。

「親、兄弟、子供、夫婦。皆一様に常以上に親睦を深めるものなんだ」

「そういつものなのね」

皇妃の国には無かったその習わしに「なるほど」と頻りに頷いている。

「普段よりも会話をし、普段よりも共に過ごし、…普段よりも親密に接する」

段々と陛下の声音がおかしなことになってきたことに皇妃は「ん？」と首を傾げる。

それと同時に促されるまま歩いてきたが、この道は自室に戻る道ではなく湯殿へと向かう道であることに気づき、まさか、という思いが脳裏を過ぎった。

「さて、我が皇妃よ」

陛下はそれはそれはとても愉しげな声で改めて皇妃へ話しかける。

「我々も常以上に親睦を深める為に、まずは一緒に冷えた体を温めようか。もう恥ずかしいなどと思わないくらいに」

「お断りしまっ…！」

逃げようとしたが時既に遅く。ひょいと抱え上げられて足早に湯殿へ続く扉の前まで連れてこられてしまった。

「湯殿に大きな窓があるのは知っているだろうか？冬場は雪を見ながら風呂に入るのが最高だ。それにお前の好きな酒も用意させよう。俺も潰れん程度に付き合っぞ」

「良い！そんな気遣いいらないっ！」

「さあ、二人で雪見酒と洒落込もうか」

「さつき飲んだからぁー！ー！ー！」

降り積もる雪がしんと世界を静かに白く塗り潰している。皇妃の悲痛な叫び声その白に吸い込まれて程なく、消えた。

甘党陛下と酒やけ皇妃と雪見酒（後書き）

新年あけましておめでとございませう。
今年もどうぞよろしくお願い致します！

新年早々相変わらずな二人ですが、これからもどうぞ生暖かく見守
って下さいますよう（m _ _ m）
お読み頂きましてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366z/>

甘党陛下と酒やけ王女

2012年1月5日00時51分発行